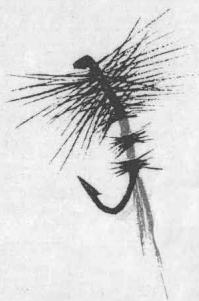


釣

人

人 釣



井伏鱒二

新潮社版



Printed in Japan ©

隨筆
釣人

定價八〇〇圓

昭和四十五年六月二十五日印刷
昭和四十五年六月三十日發行

著者 井 伏 鱒 二

發行者 佐 藤 亮 一

印刷者 鎌 川 與 五 郎

發行所 株式會社 新 潮 社

東京都新宿區矢來町七一
電話東京(03)321-1121・振替東京八〇八

印刷所 二光印刷株式會社

製本所 大進堂製本所

△落丁、亂丁本はお取替えいたします

釣人 目次

釣人

七

私の好きな詩一つ

四

富ノ澤麟太郎

七

シンガポールで見た藤田嗣治

七

戦争中の徴員・平野直美

七

鷗外の手紙

八

手控帖より

九

宇野(浩二)さんの魚釣

二六

大きな木

二三

鳥の聲

一四二

風月翁

一四七

羽織

一五〇

ヤマメ釣

一五六

七月の日記

一五九

田中さんのこと

一六三

風貌・姿勢

一九一

あとがき

二二九

裝
畫
吉
岡
堅
二

隨筆
釣
人

釣人

十何年前のこと。佐藤^{こうせき}垢石氏が亡くなって間もない頃、得山さんという釣好きの老人が、垢石先生の書翰または短冊を、得山さん所蔵の骨董品と交換してくれと手紙で云って來た。當人は目下病臥中のため、口述して枕頭の者に代筆させていると斷わつてあつた。女性の筆蹟である。この手紙を私は他の古手紙と一緒に藏つていたが、ちよつと参考のため今ここに取出して來た。ずいぶん長い文面だから、原稿二枚程度ですむように抄出する。

人
釣
このたび、はからずも佐藤垢石先生の訃を新聞で知つた。哀悼にたえない次第である。不躰ながら貴殿は垢石先生の鮎釣の弟子と聞いている。おそらく貴殿も落膽されたことだろう。謹んで弔意を表したい。

さて、自分は垢石先生と相識の間ではなかったが、かつて鮎の釣場に於て他所が
ら見かけたことが再三再四に及ぶ。その釣姿はまざまざと自分の脳裡に残ってい
る。服装は粗末で古風だが、竿をかまえている姿、竿を立て鮎を引寄せるときの姿
が見事であった。ことに鮎おとりの鮎を附けかえるとき、一般の釣師と違って竿を垂直に
立て、鮎をつけかえる操作をしながらも、穂先を微動だにさせないのは神技であっ
た。自分は目近くそれを見て、あれは頬と肩と、折りまげた膝とで竿の手元を挟み、
垂直に立てることによって竿の重さを消しながら、安定を保たせているものと見
た。爾來、自分は鮎をつけかえるにその型を眞似て來た。これを釣師としての自分
の誇とした。

御承知の如く友釣は奥が深い。自分は不惑の年から友釣を習い、遅蒔きながらその
快味を覺えたので、反って執心の仕方が只ならぬものであった。釣のために會社を
縮尻ったこともある。今では病床にあるため川にも釣具屋にも行けないが、釣場の
思い出は鬱屈した今日の自分の氣持を引きたててくれる。ついでに僭越ながら垢石
先生の筆蹟を表装して床の間を飾り、先生の神技を偲ぶよすがとしたい。もし貴殿

に於て垢石先生眞筆の色紙または書翰の類を御所藏なら、自分の所藏する骨董品の何かと交換して頂きたい。

自分は一度、澁川の釣宿に於て垢石先生の魚拓を見た。一尺ちかい鮎を巧みに刷り、釣った年月日と御名前が書いてあった。しっかりした筆蹟だと思った。

右のような次第であるが、どうか病床に伏す年老いたる釣の蟲を喜ばせるようにして頂きたい。——以上。

私は昭和二年から現在まで、日記を書く手間を省くため、人から貰った印象の深い手紙を選んで溜めて來た。嬉しい手紙、悲しい手紙、用件の手紙、第三者のことについての手紙、旅行に出る打ちあわせの手紙、よせがき寄書の手紙、飲友達の書いてくれた送狀など、各種各様だが、月に大體十通ぐらいの割で手文庫に入れ、ときたまそれを纏め、紐で縛つて押入のなかの大箱に藏つて置く。垢石の手紙も何通かある筈だが、毛筆で書いた書翰を垢石から貰った記憶がない。鉛筆やペンで書いたものばかりだ。巻紙や詩箋のようなものは使わなかった人だろうか。得山さんへの返事には、せつかく

のところ毛筆のものが無いから、御期待に添いかねると書いた。

話は別だが、先月か先々月「林芙美子を語る對談會」に出ることになったので、押入のなかの古手紙の束をほぐしてみた。昭和四年か五年頃、林さんが尾道へ講演旅行に出かけた年月日と、講演を引受けた経緯を確かめたためであつた。たしか昭和四年の春ではなかつたかと思う。

そのころ私のうちでは電話を引いてなかつたので、ちょっとしたことでも葉書か手紙で用を辨じていた。旅行の打ちあわせとなると、日取の變更とか同行者の都合など、いろいろ手紙で打合わせをするから林さんの手紙も何通かある筈だが、なかなかそれが見つかつてくれなかつた。まだか、まだか、と忙しく繰っていると、私の實の兄貴のよこした親展書留の手紙が出た。意外であつた。兄貴の手紙は一通も保存しなかつた筈なのに、東京市外井荻町下井草一八一〇（現在の東京都杉並區清水一ノ一七ノ一）の私宛である。消印は昭和三年二月二十日となっている。

そのころ、私の兄貴は生れ在所で元氣に暮していた。私によこす手紙には、いつも

兄貴風を吹かすようなことを書いていたが、太平洋戦争の最中、昭和十七年に私が徴用でマレー半島へ行っている間に亡くなった。急性肺炎で僅か六日患っただけである。その訃報はシンガポールの徴用員事務所で受取った。爾來、二十七八年ぶりに兄貴の手紙を（古手紙だが）手に取ることが出来た。もうこれ一通以外には、私宛の兄貴の書翰は残っていない。

その手紙の中身を、私は見ないで保存するだけにしてやろうかと思った。兄貴風を吹かされていたら厭である。でも、ちよつと封筒の匂を嗅いでみた。手の平に載せて重さがあるかと揺すってみた。それから中身を出してみると、兄貴の手紙のほかに佐藤垢石の手紙が入っていた。

兄貴の手紙を先に讀んだ。

拜復

お手紙拜見。（中略）の爲替を送ります。半端の分は配當金としてもらったものですが、そのまま送ります。そして、この半端の分は「二月十五日」のお前の誕生日

のお祝いとして。

十一日の紀元節の日、田和の安夫さんに逢い法成寺村を訪れました。一月二日、私を田和家で招待してくれたのですが、忙しくて行けなかった。これは二日に、お婆さんの七十七の賀があつたそうで、草浦の醫者と私を呼んだのであつたと言っていました。半日話して歸りました。

小説もお前が下積みで苦勞することは承知の上だし、私はかまわぬけれども世間體からは、ちょっとぐらい賣れてくれるのは悪い事ではない。お前は學業も途中で止めたりしているし、勤めてみても長く續く事もあるまいし、行く道は一つときめて今の仕事を成就してくれなくては困る。

急ぐ事もないわけだが努力は續けなくては、と思います。

二月十九日

文郎

鱒二殿

追伸。三月八日は亡父の命日です。その頃、法事をする考えです。お前は歸らぬでもよいでしょう。

「世間體からは、かね」つい私は、心のなかで云つてみた。大事な亡父の法事に、文學青年饗^{やう}れのすがれた舎弟が東京からのこのこやつて來て、親戚や近所の人の集まる席に顔を出す。兄貴としては、たまつたものではない。世間體からは具合のよいことではないのにきまつている。

こんな手紙を貰つたことは忘れていたが、讀みなおしているうちに、半端の金をつけた爲替を兄貴から受取つたことを思い出した。それでまた消印の日附を確かめて繰返し讀んでいるうちに、だんだんと思ひ出すことが重なつて昨日のここのようにはつきりした記憶になつて來た。私が高利貸へ拂う金を送つてくれたときの兄貴の手紙である。昭和二年の夏から三年にかけ、私は代田橋の高利貸に拂う利息に追われていた。月末ごとに、その高利貸がジンジン端折りに自轉車でやつて來て、「いったい拂う氣か拂わない氣か、はつきり云つて、どっちだね」と高飛車に云うかと思うと、手のひらを反したように、「いや、大した金額でもございませんからね、すぐお拂い下さいますね」と云つたりした。慇懃尾籠というのがこれだ。血の出るような金をしほ

るには、この手を使うのも一方法だろう。こちらは纏めて拂うことが出来ないの、利息だけ拂って引取って行ってもらう。實際、大した金ではないが、無い袖は振れないのであった。月末とか年末というものが嫌いになった。

昭和二年の四月上旬、私は現在居住するこの地所へ家を建てることにして、家が出来あがるまでの豫定で荻窪八丁通りの平野屋酒店に下宿した。建築費は纏めて兄貴から送って貰い、たまたま地所をさがして知りあいになった老人の紹介してくれた棟梁に、前金で建築費をみんな手渡した。棟梁はいつも酒を飲んで現場へ来るお人好しのような男だが、どうしたことか建前を終って屋根瓦を上げたきり雲隠れしてしまった。下請の大工は年とった方も若い方も、棟梁の住所を知らないと言った。それで棟梁の住所を訊きに、紹介してくれた老人のところへ若い方の大工を連れて行くと、いきなり向うは居丈高になって大工を叱りつけた。

「無禮者。ここは、大工ごとき者の来るべきところでない」

えらい劍幕で大工を先ず縮みあがらせた。私には言葉をにごして話を有耶無耶にさせてしまった。こいつ、ずるいぞと痛感したが、なぜ老人がそんなにまでずるくして